

「still human」 1分25秒

初めて"それ"をした時のことを、ありありと覚えている。私は、足先にカメラを装着し、その映像をヘッドマウントディスプレイを通してリアルタイムに見ている。つまり、私の目は足先に移される。見慣れたはずの世界が、まるで初めて見たかのように鮮烈に映る。衝動で思考が満たされ、言語的思考は失われていく。このことは、私の身体全体を変性させる。「前」は足先の方へと変わり、それによって脚は首に、尻は肩に、そして両腕が後ろ足に、肉体の構造が変化していく。私はまるで生まれ直したかのように、新しい身体の使い方を試行錯誤する。確かに今、私は何か違うものになりつつあるという喜びを味わっている...

「"コンビニエンス"」 2分59秒

この時のことを彼はこう語った。「自分の世界に入り込んでひたすら楽しかった。コンビニに向かおうと外に出た時はひたすら早く目的地に着きたくて駆け出したかった。それほど恐怖はなかった。途中集団に絡まれた時に「捕まらないの?」と言われた時は「何も悪いことはしていない!」「ごくまっとうなことをしているだけだ!」と心の中で叫んでいた。still human での時、ある種の全能感があった。世の中のルールやモラルから抜け出たような感覚だった。苦勞の末、コンビニにようやくたどり着いた時、達成感と同時に、煌々と輝く照明に感動を覚えていた。」

「飼われたい」 4分00秒

その子に出会ったのは、隅田公園でのことだった。見ないふりをして離れていく大人たちと違って、子供たちはいつも、何のフィルターもなしに私たちをみてる。じっと見つめてみたり、近づいて触ってみたり、自らの感覚で確かめてくれる。だから、この子みたいに、安心してしまえるほど近くにいてくれることもある。「よーしよーし」と撫でられるたびに、じんわりと嬉しさが込み上げてくる。彼が「この子育ててもいい?」と母親に尋ねてくれたことが本当に嬉しくて、私は心から「飼われたい」と思っていた。

「LOVE」 4分34秒 ※展示会場では流すことができないため、個人的な形でご覧ください。

ある日の昼下がり、偶然彼と二人だけでいた。そこで、互いにじっと見つめあったらどうなるだろうね、という話をして、ベッドの上で still human となった。すると、だんだん互いのカメラ(目)は近づいて、そして、コツン、とぶつかった。その時、お互いに確かに何か、甘い電流のようなものが走るのを感じた。その瞬間はまさに、小さい頃「キス」という概念すら知らないまま、不意にそうしてしまったときのような感覚だった。

「那智の森」 4分35秒

その人は、和歌山県・那智に住みながら、四足歩行を日常的に行っている。その人に連れられて、私は、那智・熊野古道の森にいた。この時、私は後頭部にカメラを装着していた。これは特に、人間がかつて四足動物であった頃の目の位置に近い。その体で、よく鹿も通るといふ苔むした森を歩く。道は険しく、急な坂や、小さな崖がたくさんあった。その度に、その人-もはや人であるとも思えない"それ"-は私を助けてくれた。"それ"が、崖から落ちないように支えてくれる時、鹿の足跡や、水が流れる感触-を手をとって教えてくれる時、私は動物的に、"それ"を「親」だと感じていた。